

製作技術からみた埴輪製作集団の考察

——北部九州の事例を中心に——

花 熊 祐 基

はじめに

古墳時代後期の円筒埴輪は、量産化を指向したため製作工程の省略化が図られた。外面例えば、二次調整や突帯間隔設定の放棄、断続ナデ技法による突帯の貼付・成形などが、その代表的なものとして挙げられる。そういった特徴を持つ埴輪はV群埴輪、もしくはV群系埴輪と呼ばれる。そして、V群系埴輪への型式変化の背景には埴輪生産組織の再編成が想定されてきた。

断続ナデ技法は、突帯の元となる粘土紐を埴輪の器壁に貼付・成形する技法であり、本来はその後ヨコナデ調整で突帯の形状を調整する工程を伴う。しかしながら、近畿や四国、九州の一部の地域に限って、最下段の突帯のみヨコナデ調整を放棄して、断続ナデ技法で貼付されたままの状態が終了しているものが存在する。この種の埴輪の突帯形状はユビナデやそれに伴う爪痕をとどめる点、最下段突帯にしか認められないといった諸特徴を有する。したがって、破片でもその存在や部位の特定が容易という利点がある。加えて、限られた地域、瀬戸内沿岸や大河川の流域に集中して分布する状況がみられることから、埴輪製作集団とその動向を検討するのに有効な資料と考える。そこで、本稿では断続ナデ技法を用いた円筒埴輪を主な分析対象とし、その製作技術や形態・規格などから、断続ナデ技法を保持していた製作集団を考察し、その特徴と動向を明らかにすることを目的とする。あわせて、その背景にある要因についても検討を加えていきたい。

第1章 研究史

第1節 断続ナデ技法に関する研究史

断続ナデ技法という用語を最初に用いたのは川西宏幸氏である。川西氏は全国的な円筒埴輪編年を構築する際、古墳時代後期の円筒埴輪の最下段突帯にかぎってみられる拇指と人差指の

両方もしくはどちらかを使い、断続的になでつけた突帯を断続ナデ技法と呼称した。そして、この種の技法を有する埴輪を後期の中でも新相としている（川西1978）。また、分布は畿内と紀伊、四国北部、北部九州にあり、四国・九州には畿内・紀伊から伝播したものと想定している（川西1986）。坂靖氏は、川西氏の円筒埴輪編年を再検討するとともに技法伝播の問題を考察し、断続ナデ技法についても言及している（坂1985）。坂氏は、断続ナデ技法が限定された時期と地域に流行した技法とみたが、その地域で埴輪全体に影響を与えるのではなく、一部の工人がもたらした可能性を想定している。一方、川西氏の研究成果を受け、各地で埴輪研究が進んだ。四国地方では、愛媛県で円筒埴輪の資料紹介や研究が比較的盛んに行われており、森毅氏によって今治西高校保管の埴輪資料が紹介され、その中で断続ナデ技法の円筒埴輪も紹介されている（森1983）。森氏は、愛媛県では今治地域と松山地域で断続ナデ技法が認められ、その出現時期をTK47～MT15型式期の間と想定している（森1984）。森氏の研究は、円筒埴輪の編年確立に注力されており、編年の指標として、断続ナデ技法にふれることが多く、それを製作する工人集団がどういった集団なのかという点についてはほとんど触れられてこなかった。

1980年代の終わりに近づくと、断続ナデ技法の研究が盛んに行われ始める。物集女車塚古墳の円筒埴輪を検討した弘田弘司氏は、一古墳内における断続ナデ技法の有無を工人集団の系譜の違いと捉え、物集女車塚古墳よりやや先行する古墳ではへう記号や製作技術が類似するのに対し、物集女車塚古墳ではそれがみられないことから、埴輪生産の縮小化や工人集団の再編成を推定した（弘田1988）。また、石見遺跡の埴輪を検討した千賀久氏は、断続ナデ技法の有無で二系統に分類でき、それは工人の属するグループの違いに帰属すると指摘している（千賀1988）。両氏とも断続ナデ技法の有無を埴輪製作集団の違いに関係付けながら言及している点で評価できる。

1990年代には、断続ナデ技法そのものに関する重要な研究成果が、鐘方正樹氏と中島和彦氏によって示された（鐘方・中島1992）。両氏は菅原東遺跡出土の円筒埴輪の突帯上辺に残るナナメ方向の擦痕や下辺の凹凸に着目し、断続ナデ技法とは突帯の調整技法ではなく、突帯を貼付・成形する技法と指摘した。そして、断続ナデ技法で貼付・成形された突帯のうち、ヨコナデ調整によって整形したものを断続ナデ技法A、川西氏が指摘したものを断続ナデ技法Bとし、両者を総称して「断続ナデ技法」と概念規定した。また、断続ナデ技法の出現を中期と後期の円筒埴輪の画期と捉え、その初現を河内、古市古墳群と想定している。その後、鐘方・中島両氏は、畿内では断続ナデ技法Bは南側を中心に分布し、北側での出現は遅れると指摘している（鐘方他1995）。それは石見型埴輪などの形象埴輪にもみられるからであり、断続ナデ技法Bに代表されるように省略化を進める埴輪製作集団と大和北部などの保守的な埴輪生産を行う集団と二系統あったことを想定したものである。それに対し高橋克壽氏は、断続ナデ技法とは特殊

な突帯製作技法というよりも、他の突帯にも行われる製作上の工程を最下段に限って途中で打ち切ったものに過ぎず、技法の名で呼ぶのはふさわしくないとし、無調整突帯と呼称している（高橋1995）。これらは、断続ナデ技法自体の認識や解釈が積極的に行われたもので、現在の研究の礎を築いた成果である。

また、近畿地方以外の地域でも研究が行われている。大西智和氏は、九州地方の円筒埴輪を検討する中で、断続ナデ技法が本来の工程を省略した手抜き技法であり、それが大型古墳で採用されることは、格式・出自・経歴・知識などにおいて畿内と関わりをもつ埴輪製作集団や技術に大きな価値を求めたことによって結果的に採用されたとする（大西1993）。それに対し、九州の円筒埴輪を規格性から検討した岸本圭氏は、東光寺剣塚古墳の円筒埴輪には断続ナデ技法が採用される中型品に加え超大型の円筒埴輪が含まれており、また石室に筑後や肥後で多くみられる石屋形が設けられていることに着目し、そのすべてが認められる筑後から断続ナデ技法が伝播したと指摘している（岸本1996）。また、吉備地域の押圧技法の分析を行った野崎貴博氏は、併せて断続ナデ技法も検討しており、分布の中心域とそうでない地域を比較すると、後者では明らかに断続ナデ技法を施す比率が低く、その地域では外来の技法は受容されても主体的ではないことが分かると指摘している（野崎1999）。また、断続ナデ技法の拡散を畿内政権が再び他地域との交流を深めたためと推定している。

2000年代に入ると、埴輪に関する研究がより活発化し重要な研究成果が積み重ねられ、断続ナデ技法に関する研究も深化した。まず、2000年に行われた九州前方後円墳研究会の埴輪の研究会では九州地方の埴輪の集成・検討が行われた。（九州前方後円墳研究会2000）岸本圭氏は北部九州の断続ナデ技法の埴輪が、八女丘陵とその周辺、北九州に分布が集中し、他は福岡平野に点在するという偏りがあることを指摘する。八女の立山山古墳群と北九州の曽根古墳群の円筒埴輪が断続ナデ技法に加え、外面調整等が類似することから、同一の工人集団の関与とみた（岸本2000）。また、四国地方では山内英樹氏による三島神社古墳の円筒埴輪の再検討が行われている。山内氏は、三島神社古墳の円筒埴輪は、細部は異なりながらも製作技術や法量に規格性が認められ、その出現は極めて突発的で、伊予地域内ではその系譜は追うことができないとする（山内2001）。そして、2003年に行われた第52回埋蔵文化財研究集会では、円筒埴輪の製作技法に焦点が当てられた。藤井幸司氏による窖窯導入以降の円筒埴輪の製作技術の復元的研究では断続ナデ技法が突発的に出現するのではなく、それ以前の技法を保持する製作者と一定期間共存し、さらに技法の複合化を起こすほど近い関係を有していたと指摘し、この状況は埴輪生産集団が再編成される過程を示すものとしている（藤井2003）。また、同資料集では他に鐘方正樹氏が断続ナデ技法Bの分布状況をふまえて、河内や大和南部などでは断続ナデ技法Bの分布が集中する傾向にあるのに対し、南山城や奈良盆地北部では、断続ナデ技法Bによる

粗雑化が許されないような製品管理が継続的に行われていたとし、その背景に継体大王の支持勢力と反支持勢力による土師部の系統の違いを想定している（鐘方2003）。また、三島地域や乙訓地域に断続ナテ技法Bが遅れて現れる背景には毛受系土師氏の一部移住が関係していると想定し、それが継体陵である今城塚古墳築造を契機と想定している。さらに同じ資料集では九州の様相を岸本圭氏が検討しており、岩戸山古墳を断続ナテ技法の初現とし、技法の発信源が八女古墳群と想定している（岸本2003）。個別研究では、中村利至久氏による技法そのものの復原（中村2003）の他、井上義也氏が断続ナテ技法の伝播に関する重要な指摘を行っている（井上2004・2008）。井上氏は真覚寺古墳を中心に、北部九州の断続ナテ技法の円筒埴輪を検討し、畿内色の強い埴輪が導入される背景にヤマト王権が設置した屯倉との関係を想定している。それまでの研究と異なり、断続ナテ技法の出現を漠然とした畿内との関係性で捉えるのではなく、屯倉といった具体的な要素から検討した点で、その背景を理解しやすい。また、南原古墳群と富久遺跡を検討した宮川泰男氏は、6世紀後半に曽根平野や京都平野では、前方後円墳だけでなく小円墳で断続ナテ技法が採用されることから、北部九州ではこの時期に伝統的秩序が衰退し、新しい政治秩序が生まれたことを推定し、断続ナテ技法の出現は畿内と地方の政治的関係を直接反映していると指摘した（宮川2007）。

近年では、紀伊の埴輪を継続的に研究されている河内一浩氏は、紀氏と埴輪の関係性を検討する中で、断続ナテ技法の分布域と岸俊男氏が立証した紀氏の分布状況と合致すると指摘し、その関係性を想定している（河内2013）。四国では、中国四国前方後円墳研究会により古墳時代後期の埴輪の研究会が行われ、山内英樹氏と西本和哉氏が四国の埴輪の検討を行っている。四国西部を担当した山内氏は、断続ナテ技法Bに限られた時期に中規模前方後円墳に採用される点に注目し、前方後円墳の後期における展開とあわせ、「畿内的」な様相と指摘している（山内2012）。西本氏は四国東部の埴輪を検討し、埴輪の型式変化には中心的な地域である畿内をはじめとする諸地域と四国東部の地域間の交流史が顕著に投影されているものとした（西本2012）。また、形象埴輪の観察から摂津や大和盆地中・南部の影響を想定している。

以上のように、断続ナテ技法には数多くの研究が行われている。最初期の研究は編年研究に関わるものが多く、その時期の位置づけに視点が集中していたが、鐘方正樹氏等の研究以降、主に近畿地方では6世紀の政治変動と関連付けて研究が行われてきたし、四国や九州でも畿内政権との関わりや瀬戸内南岸航路との関係が注視されてきた。その一方で、断続ナテ技法Bを有する埴輪を製作した埴輪製作集団の実態は不鮮明である。鐘方正樹氏は、前述のとおり断続ナテ技法Bを保持する土師部を反継体勢力の土師部と想定する一方、三島地域や乙訓地域に断続ナテ技法が出現した背景に今城塚古墳築造に関わる毛受系土師氏の移住を想定しているが、何故反継体勢力と想定する土師氏を登用したのかの説明は不十分である。物集女といった地名

や古代史の成果に基づいたものではあると思うが、埴輪自体の比較がなされていない点も問題点といえる。また、四国・九州地方に目を向けても、注目されるのは畿内との関係であり、四国・九州間との関係について触れた研究はほとんどみられない。瀬戸内南岸航路を交流ルートと想定するのであれば、畿内だけではなく四国・九州間における交流も当然考えるべきであり、重要な課題と考える。

したがって、本論ではまず断続ナデ技法Bを有する円筒埴輪がどういったものであるのかを製作技術や規格、分布から分析する。次に、北部九州地域をスタディケースに、断続ナデ技法Bを有する埴輪を比較・検討し、その出現や展開の様相や地域間との関係を明らかにする。そして、そこから得られた情報を基に、断続ナデ技法Bを保持する埴輪製作集団の性格について分析し、またその背景に言及したい。

第2節 用語と概念の整理

まず、断続ナデ技法に関する用語と概念の整理を行いたい。現在、断続ナデ技法に関する用語は研究者によって様々な呼び方がなされている。具体例を挙げるなら、断続ナデ技法（川西1978・岸本1997・井上2004など）、断続ナデ技法A・B（鐘方・中島1992）、断続ナデ技法A類・B類（十河2007）、断続ナデ貼付技法（和田2005）、無調整突帯（高橋1995）などがある。この中で同じ意味合いを持つものを集めると、断続ナデ技法A、断続ナデ技法A類、断続ナデ貼付技法の一群と断続ナデ技法B、断続ナデ技法B類、無調整突帯の一群となる。前者は断続ナデ技法で貼付後、ヨコナデ調整を加えるいわば普通の突帯である。後者は、今回の分析対象となる最下段突帯にみられる断続的にナデ付けられたままの突帯であり、川西宏幸が最初に定義したものである。断続ナデ技法Bと無調整突帯の最も大きな違いは、最下段の断続ナデ技法Bを技法と捉えるか捉えないかの違いである。これは解釈の分かれる点であるが、筆者自身は最下段突帯に限ってヨコナデ調整を施さないといったルールが認められ、それは埴輪工人が意図して行っていると考えるので、断続ナデ技法Bは製作技法であると定義したい。くわえて、無調整突帯という呼称は断続ナデ技法以外にもあてはめることのできる用語で、広い意味で捉えられるといった点で、やや不適切と思われる。したがって、本論では、呼称を断続ナデ技法B、それをを用いた埴輪を断続ナデ技法B円筒埴輪と呼称することにしたい。

第2章 断続ナデ技法B円筒埴輪の基礎分析

第1節 時期別分布の検討

断続ナデ技法B円筒埴輪は、近畿地方^①や四国地方、九州地方で分布が集中する。ここではその分布傾向が時期ごとにどのような移り変わりをみせるのか検討したい。資料数は、近畿地方

で37例、四国地方で12例、九州地方で17例の計66例を確認している（図1）。

まず、断続ナデ技法B円筒埴輪の初現期の様相をみていきたい。先行研究では、およそ6世紀前半（MT15型式期）に出現し、V期の埴輪のなかでも新しい様相を示すと考えられている。しかし、これは資料的制約が大きい中での想定であり、また地域差や細かい時期差の検討にも課題が残る。したがって、現時点で確認できる資料をふまえながら検討する必要がある。

最も遡る可能性があるものは、五世紀後葉（TK23型式期）に築造された前の山古墳である。前の山古墳はTK23型式期の須恵器が墳丘から出土している。断続ナデ技法B円筒埴輪は、2段目以降にBd種ヨコハケが施されており、須恵器の年代観とも齟齬をきたさない。また、ほぼ全ての個体にB種ヨコハケが施されており、埴輪の型式でみても最古相に比定できる。やや下る資料としては、5世紀末～6世紀初頭（TK47～MT15型式期）の近畿の北花内大塚古墳や郡川西塚古墳、四国の波賀部神社古墳がある。郡川西塚古墳や波賀部神社古墳からは、当該期の須恵器が出土している。北花内大塚古墳の墳丘から出土した円筒埴輪には断続ナデ技法B円筒埴輪の他、ごくわずかにBd種ヨコハケを施した円筒埴輪がみられる。この時期は近畿地方を中心に、一部四国西部でも確認できる。

資料数は6世紀前葉（MT15型式期）になると急激に増加する。近畿地方では、河内・大和を中心に出土する古墳・遺跡が顕著になり、ボケ山古墳や白髪山古墳等の大型古墳で樹立される。また、摂津、紀伊地域にも分布が広がる。前段階と同じく伊予地域では他の地域に先行して断続ナデ技法Bが認められる点である。MT15型式期の須恵器を伴う三島神社古墳は、断続ナデ技法B円筒埴輪に加え、「畿内型石室」を採用するなど、畿内的な要素を多く含む古墳であり、後述する西日本の古墳とは異なる。

6世紀中葉（TK10型式期）をむかえると、分布の様相が大きく変化する。近畿地方では河内・大和といった王権中枢の地域で資料数が激減し、摂津・山城地域や紀伊地域で増加する^②。また、円墳などの小規模墳での樹立も増加し、大型古墳では認められない。西日本では、伊予地域には認められなくなり、代わって四国東部の讃岐・阿波地域でその分布が顕著になる。TK10型式期の須恵器が出土した讃岐の王墓山古墳では、埋葬施設でも九州でみられる石屋形を使用するなど、時期以外の点でも伊予地域との差異が認められる。本論の中心となる九州地方にも分布が拡大する。豊前地域の曾根古墳群中の上ん山古墳や荒神森古墳は、周濠から出土した土器がMT15～TK10型式期に収まるもので、九州地域での断続ナデ技法Bの出現時期と考えられる。豊前では曾根平野を中心に継続して断続ナデ技法B円筒埴輪の生産が確認でき、継続的な生産体制が想定できる。北部九州では他に筑前で東光寺剣塚古墳など2例、筑後・肥前で権現塚古墳や乗場古墳など3例があるが、いずれもTK10型式期以降の時期である。南九州では、日向地域の新田原古墳群中の前方後円墳である機織塚古墳と水神塚古墳で認められる。

この二基の古墳は築造時期を決定しうる資料はないが、おおよそ TK10型式期の築造と想定されている。

6世紀後葉（MT85～TK43型式期）になると、埴輪を樹立することそのものが衰退し、埴輪を確認できる古墳自体が西日本では激減する。近畿地方では断続ナデ技法Bがみられなくなり、それを用いない埴輪が一部の古墳で樹立される。四国でも同様に、断続ナデ技法Bを用いない埴輪のみが確認できる。一方、九州では豊前地域に限って断続ナデ技法B円筒埴輪の使用が継続するようである。京都平野の南原古墳群中の小円墳や富久遺跡の大溝から須恵器と共伴して出土しており、おおよそ MT85～TK43型式期が初葬時のものと考えられる。

以上のことをまとめると、断続ナデ技法B円筒埴輪はおおよそ5世紀末～6世紀初頭に近畿地方を中心に出現し、6世紀前葉には近畿地方と伊予地域で用いられる。中葉以降は近畿では王権の中核ではなく、その周辺で用いられ、加えて西日本へ広く拡散している様相が読み取れる。また、地理的条件に目を向けると、瀬戸内海沿岸などの海岸沿いの場所や淀川、紀ノ川などの大河川沿いに多く分布しており、水上交通路にのって埴輪製作集団の交流や製作技術の伝習が行われたと想定できる。また、このような特徴的な分布を示すことは、断続ナデ技法Bを保有する集団としない集団の系統差によるものと考えられる。

第2節 製作技術の検討

古墳時代後期の円筒埴輪の系統は、大別するとV群系埴輪とIV群系埴輪の二つに分かれる。前者は、外面二次調整や突帯間隔の設定を放棄し、断続ナデ技法で突帯を貼付・成形したものを指す。後者は、外面二次調整や突帯間隔の設定といった中期の製作技術を継続して用いている埴輪である。前述したとおり、最古相の資料である前の山古墳の断続ナデ技法B円筒埴輪は、二段目に Bd 種ヨコハケを施しており、突帯も等間隔かつ水平に貼付されているので突帯設定を行っている可能性が極めて高い。このことから、初現期ではIV群系埴輪とV群系の間には断続ナデ技法B以外の顕著な差異はみられないが、時期が下るにつれて、製作技術の系統が分かれていくものと考えられる。また、前節でもみたとおり特徴的な分布を占めており、V群系の埴輪製作集団の中でも系統差があったと考えられる。先行研究でも断続ナデ技法Bの有無に注目が集まり、他の製作技術についての比較検討はほとんど行われてこなかった。したがって、本節では断続ナデ技法B円筒埴輪の製作技術について検討を行っていきたい。製作技術を検討するうえで、検討を加える属性は外面調整、底部調整、成形方法である。

(1) 外面調整

V群系埴輪は二次調整を放棄し、一次調整のタテハケ調整のみを施す。断続ナデ技法B円筒埴輪も同様であるが、一部異なる調整を施すものもみられる。例えば、市尾墓山古墳ではタテ

ハケ調整に加えて、外面すべてにナデ調整を施した円筒埴輪が一定数みられる。ナデ調整を施す例は他に三島神社古墳があるが、全体でみれば底部のみもしくは底部から二段目にかけてナデ調整を施す事例は多くみられる。他に九州も筑後の権現塚古墳では断続的な二次調整ヨコハ^③ケが施されている。近畿地方や四国地方ではタテハケ調整が大半であり、九州地方でも同様であるが、その一方でナデやヨコハケなども用いており、そのような技法は九州地方の断続ナデ技法Bを用いないV群系埴輪やIV群系埴輪にそのようなものは用いられないことから集団の違いが想定できる。

(2) 底部調整

古墳時代後期の円筒埴輪の特徴の一つとして、底部調整の存在が挙げられる。底部調整は小工程の省略による底部の歪みを調整するものであるが、V群系埴輪で普遍的に用いられているのは、板状工具による押圧である（以下、板押圧と呼称する）。これは、断続ナデ技法Bの有無にかかわらず用いられており、大きな差異は認められない。また、九州では板押圧による底部調整はあまり用いられないとされているが、後述する規格・法量がその要因と思われる。九州では径が大きい、もしくは器高が高い円筒埴輪が多く、小工程を省略しないので底部調整を施す必要がないことと、その大きさから倒立して底部調整を施すことが困難である。逆に九州でも、真覚寺古墳や南原1号墳など、小型の円筒埴輪では板押圧を用いており、円光寺古墳では板押圧とタタキが認められる。

第3節 規格・形態の検討

前節では、主に製作技術の面で検討を行った。次に本節では規格性・形態といった面で検討を行ってきたい。取り扱うものとして、底部径・器高・段数構成・底部高・突帯間隔・スカシ孔・プロポーションを中心にみていく。古墳時代後期の円筒埴輪は、基本的に小型化していく傾向にあるが、断続ナデ技法B円筒埴輪には大型品も含まれるため、それらと比較する必要がある。

(1) 底部径

小型品…底部径が20cm以下 中型品…底部径が20～30cm

大型品…底部径…30cm以上

小型品は古墳時代後期に最も普遍的みられる規格である。断続ナデ技法Bの有無やV群系・IV群系にかかわらず使用されている。中型品は近畿地方では市尾墓山古墳や笹針山一号墳、ボケ山古墳、白髪山古墳といった大型古墳でみられる傾向が強い。四国では波賀部神社古墳と二つ塚古墳で中型品が確認できる。どちらも伊予地域の前方後円墳であり、そこにだけみられる。九州地方では多くみられ、豊前の曾根古墳群や筑前の東光寺剣塚古墳の埴輪が挙げられる。

大型品は近畿地方ではボケ山古墳で認められる以外は見当たらず、四国地方では1例も確認できない。九州地方では、豊前の上ん山古墳や荒神森古墳、筑後地域の乗場古墳や権現塚古墳で認められる。底部径の面で見ると、大型品は北部九州に集中してみられるといった傾向が看取できる。

(2) 器高

I類…40～50cm II類…50～60cm III類…60～70cm IV類…70～80cm

V類…90cm前後

I類は、近畿・四国で確認できる。園田大塚山古墳や三日月市3号墳、石見遺跡、三島神社古墳等で確認できる。およそ45cm前後に集中することが多い。II類は、市尾墓山古墳、物集女車塚古墳、二つ塚古墳、東光寺剣塚古墳等で確認できる。およそ55～60cmに集中する。III類はそれほど多くみられないが権現塚古墳で認められる。およそ65cm付近に集中する。IV類は、乗場古墳や荒神森古墳の大型品、富久遺跡などでみられる。およそ75cm付近に集中する。V類は荒神森古墳の中型品に認められる。その器高は90cm前後に収まる。底部径と同じく、器高が高い資料は近畿地方では大型古墳に多く、70cmを超える資料は北部九州にしか認められない。

(3) 段数構成

・3条4段構成 ・4条5段構成 ・5条6段構成 ・6条7段構成 ・7条8段構成

3条4段構成、4条5段構成は、近畿・四国・九州を問わず認められる。代表的な資料として、前者は三日月市3号墳、石見遺跡、公文山古墳群、富久遺跡が、後者は、物集女車塚古墳、園田大塚山古墳、三島神社古墳、荒神森古墳、東光寺剣塚古墳等が挙げられる。5条6段構成は、近畿地方でのみ認められる。代表的な古墳として、市尾墓山古墳、三日月市3号墳等が挙げられる。6条7段構成は、近畿地方と北部九州でみられる。確認できる古墳は市尾墓山古墳と乗場古墳がある。最後に7条8段構成は、前の山古墳で認められる。また、南塚古墳と昼神車塚古墳、権現塚古墳では、スカシ孔の残存状況などから5条6段以上になると考えられる。いずれにせよ、5条6段構成以上の円筒埴輪は、近畿地方と北部九州の一部にしかみられない規格である。

(4) 底部高・突帯間隔

A類…底部高＝突帯間隔 B類…底部高＞突帯間隔

底部高・突帯間隔の関係は、底部高が突帯より高くなるかもしくは同程度かで分類している。その基準はプラス2cm程度を境界にしており、また古墳の中での数の比率が高い方がその古墳における規格の基準と捉えている。比率が半々の時はおよそ二系統の規格があった可能性があるが、およそどちらか一方が主体的になるので、前述の基準で考えていく。大多数を占めるのはA類である。分布を比較すると、河内・大和・摂津・伊予・北部九州ではA類が主体的であ

り、逆にB類が主体的になるのは紀伊・讃岐・阿波といった地域である。

(5) スカシ孔

この時期は一部の例外を除いて円形スカシ孔を1段に2孔ずつ穿孔する。また、その配置は、段ごとに直交させて穿孔するのが基本形である。例外として、北花内大塚古墳や権現塚古墳では三角形スカシ孔が認められるが、前者は断続ナデ技法Bとの関係性がわからない。権現塚古墳では、断続ナデ技法B円筒埴輪に逆三角形スカシ孔を穿孔する例外的資料と言える。スカシ孔の穿孔パターンもいくつかみられるが、段数構成ごとにみると、以下のとおりになる。
3条4段…2・3段目 4条5段構成…2・4段目、各段 5条6段構成…2・4、3・5段目
6条7段…3・5段目、各段 7条8段…3・6段目、2・4・6段目

近畿地方や四国地方では1段以上空けてスカシ孔を穿孔することが多いのに対し、北部九州では各段に穿孔する例が主体的であり、地域差と考えられる。

小 結

以上のことをまとめると、近畿地方や四国地方では、製作技術、規格・形状の面で大きな差異認められない。逆に九州地方では、北部九州に独自性が認められる。規格・法量をみても明らかに近畿地方や四国地方より大型の円筒埴輪が多くみられるし、権現塚古墳ではスカシ孔の形状やヨコハケ調整などかなり地域色が強い埴輪を製作している様相が見て取れる。従来、北部九州の断続ナデ技法Bは近畿地方との関係性に焦点を置いて考えられてきた。しかしながら、断続ナデ技法Bを保有する埴輪製作集団と近畿地方の埴輪との技術的系譜関係、生産体制の検討は十分とはいえない状態にある。したがって、次章では北部九州地域の古墳を中心に、埴輪の製作技術や規格などを細かく検討し、断続ナデ技法Bを保有する埴輪製作集団とその生産体制を考えていく。

第3章 北部九州における導入と展開

これまで、西日本の断続ナデ技法B円筒埴輪の出現と展開の様相をみてきた。最後に、本節では九州地方の詳しい様相をみていきたい。九州では17例みられ、最も資料数が多いのは瀬戸内沿岸の豊前の10例で、他は筑前に2例、筑後に2例、肥前に1例、日向に2例認められる。

それでは、地域ごとに埴輪の特徴を見ていきたい。まず、最も資料数に恵まれる豊前地域であるが、北九州市の曾根平野とそこに築造された曾根古墳群で5古墳1遺跡、曾根平野からやや南に下った荻田町の京都平野で2古墳1遺跡、吉富町で1古墳から出土している。

第1節 豊前地域

〔上ん山古墳（福岡県北九州市・関川2010）〕 上ん山古墳は墳丘長50mの前方後円墳で、埋葬施設は調査が行われていないため不明である。断続ナデ技法B円筒埴輪は、全形を復元できる資料がなく、段数構成や器高は知りえないが、中型品A類である。胴部片には断続ナデ技法Bかは不明だが、径が30cmを超す大型品もみられる。外面調整はタテハケで、底部から二段目にかけてはナデ調整もみられる。底部調整は認められず、底端部はやや歪む個体が多い。スカシ孔は円形がある。

〔荒神森古墳（福岡県北九州市・関川2007）〕 墳丘長67mの前方後円墳で、墳丘の周囲に前方後円形の周濠と周堤を巡らす。周堤を含んだ全長は90mで、曾根古墳群中最大の古墳である。埋葬施設は不明である。埴輪は墳丘と周堤に樹立されていたようで、大量に出土している。8割以上が断続ナデ技法B円筒埴輪である。段数構成は4条5段構成で、底部径が25cm前後、器高90cm前後の中型品VA類、底部径が33cm前後、器高75cm前後の大型品IVA類の2規格が認められる。これは上ん山古墳の中型品、大型品に対応するものと考えられる。スカシ孔は円形を直交して各段2孔配置しているが、中型品の一部には4段目に4孔穿孔する例や直径1cm前後の円形の副次穿孔を施すものがある。外面調整はタテハケが主体であるが、底部から二段目にかけてはナデ調整を施すものが多い。また、イタナデ調整を施すものも一定量みられる。

〔曾根丸山古墳（福岡県北九州市・宇野1984）〕 墳丘長約50mの前方後円墳で、荒神森古墳の200m南に位置していたが、現在はほぼ消滅している。円筒埴輪は小片での出土のため、段数構成や器高はわからないが、断続ナデ技法Bが確認できる。外面調整はタテハケとナデを施し、スカシ孔は円形を穿孔している。

〔円光寺古墳（福岡県北九州市・宇野2006）〕 墳丘長42mの前方後円墳で、丸山古墳の南50mに立地している。荒神森古墳と丸山古墳、そしてこの円光寺古墳の3基で、首長墓系譜の一つを成していると考えられており、円光寺古墳は基の中で最も新しい時期の6世紀後半代の築造と考えられている。埋葬施設は横穴式石室と考えられる。円筒埴輪は、断続ナデ技法Bを用いない4条5段もしくは5条6段構成の小型品IIA類が主体的に使用される。外面調整はタテハケ、ナデがあり、底部調整も認められる。それに対し、断続ナデ技法B円筒埴輪はこの中にごく少数含まれており、^④中型品A類で外面調整はタテハケ、底部にはナデ調整を施す。円光寺古墳で主体的に用いられる埴輪は、1cm辺り2～3本といった非常に粗いハケメであるが、断続ナデ技法B円筒埴輪は1cmあたり4～5本もしくは7～8本の細かいハケメを使用しており、後者

は荒神森古墳等と類似している。プロポーションも荒神森古墳等の中型品と類似した細長い形態である。

〔高島 2 号墳（福岡県北九州市・北九州市教育委員会2005）〕 上ん山古墳の南250mに位置する高島遺跡で見つかった消滅古墳で、円形に巡る周溝の一部が見つかったことから小規模な円墳と想定されている。埴輪は須恵器の横瓶や須恵器模倣杯とともに周溝から出土しており、およそ6世紀中葉の時期と考えられる。出土した埴輪は全て円筒埴輪で、段数構成や器高は不明だが、中型品 A 類である。また、突帯間隔が18cm前後と広く、径に対して器高が高い、細長いプロポーションを呈する。外面調整はタテハケが主体を占めるが、底部から2段目にかけてナデ調整を施す。

〔南原 1 号墳（福岡県京都郡苅田町・苅田町教育委員会2007）〕 直径20m前後の円墳で、埋葬施設に複室構造の横穴式石室を有する。埴輪は MT85 型式期の須恵器等の副葬品とともに石室内から出土しており、墳頂に樹立されていたものが転落したと考えられる。全形が窺える資料はないが、小型品 A 類がみられる。外面調整はタテハケで、底部に限ってナデ調整を施し、底部調整板押圧も認められる。

〔南原 5 号墳（福岡県京都郡苅田町・苅田町教育委員会2007）〕 直径17mの円墳である。墳丘はほぼ消滅しており、埴輪は、MT85～TK43 型式期の須恵器とともに周溝から出土している。1号墳のものと酷似した小型品 A 類で、底部にナデ調整、二段目にはタテハケ調整を施す。

〔富久遺跡（福岡県京都郡苅田町・苅田町教育委員会2007）〕 富久遺跡は、南原古墳群から北に150m程離れたところにある遺跡で、遺跡内からは13基の円墳と大溝が見つかっており、断続ナデ技法 B 円筒埴輪は TK43 型式期の須恵器とともに大溝から出土している。埴輪は南原古墳群に帰属するものと考えられる。円筒埴輪は 3 条 4 段の小型品 II A 類と 4 条 5 段の三 A 類、四 A 類があり、外面調整や形態は南原古墳群と共通する。底部調整は認められない。断続ナデ技法 B はおよそ 8 割の個体に認められる。スカシ孔は各段に円形を二つずつ直交して配置する。富久遺跡の円筒埴輪のプロポーションも細長い形状を呈している。京都平野の埴輪は、曾根平野の埴輪と製作技術や形態がよく似ており、埴輪製作集団の関連が窺える。

〔廣運寺山 3 号墳（福岡県築上郡吉富町・小田1982・井上2004）〕 福岡県築上郡吉富町に所在していた廣運寺山 3 号墳採集資料である。この資料は、岡為造氏が採集した埴輪で、小田富士雄氏

等が資料紹介している。6点紹介されたうち5点が底部で、すべてに断続ナデ技法Bが認められる。小型品で、外面調整タテハケ、底部調整に板押圧を施す。

第2節 筑前地域

〔東光寺剣塚古墳（福岡県福岡市・福岡市教育委員会1991）〕 墳丘長75m、二段築成の前方後円墳で、三重の周濠を有する。一番外側の周濠には造出部が設けられる。それらを含めた全長は126mになる。埋葬施設は複室構造の横穴式石室で、奥壁に平行して石屋形を設ける。築造時期は6世紀中葉と考えられる。円筒埴輪は4条5段の中型品IIA類が主体を占め、そのうち3割程度で断続ナデ技法Bが確認できる。また、断続ナデ技法Bは認められないものの、底部径が35～40cmの大型品もみられる。外面調整はタテハケで、底部に限ってナデ調整を施すものもある。底部調整は認められない。スカシ孔は各段に穿孔する。

〔真覚寺古墳（福岡県糟屋郡粕屋町・井上2004）〕 墳丘長40～45m、二段築成の前方後円墳である。採集資料のため全は不明だが、小型品で断続ナデ技法B円筒埴輪が大半を占める。外面調整タテハケ、底部調整は板押圧を施す。スカシ孔は円形である。豊前地域とは異なり、筑前地域の両古墳の埴輪は共通性が認められず、また真覚寺古墳に類似する資料もほとんどみられない。逆に東光寺剣塚古墳の円筒埴輪は、福岡平野で伝統的に用いられる形状や規格を踏襲しており、在地の工人集団が断続ナデ技法Bを受容して、埴輪を製作していたと考えられる。

第3節 筑後・肥前

筑後は乗場古墳と権現塚古墳の二例、肥前は小隈山古墳が対象である。乗場古墳と権現塚古墳がTK10型式期の須恵器が出土しており、6世紀中葉頃の築造時期と考えられる。小隈山古墳は、築造時期を決定しうる資料にかけるが、断続ナデ技法Bの出現が九州ではTK10型式期以降であるため、小隈山古墳の築造時期も同様と考えられる。

〔乗場古墳（福岡県八女市・八女市古窯跡群調査団1972）〕 墳丘長70mの前方後円墳で周濠、周堤を有する。埋葬施設は複室構造の横穴式石室で、幾何学文様を彩色した装飾古墳である。円筒埴輪は6条7段の大型品IVA類で、各段に円形を二つ、直交して穿孔する。最下段突帯は断続ナデ技法Bだが、突帯の上辺はへら状工具でナデつけられており、通常の断続ナデ技法Bとは異なる手法である。外面調整はタテハケで、底部調整は認められない。

〔権現塚古墳（福岡県久留米市・久留米市教育委員会1995）〕 直径56m前後の円墳で、二重の周濠、

周堤を有する。それを含めた全長は152mになる。埴輪は周濠、周堤から出土している。断続ナデ技法Bは円筒埴輪のおよそ3割程度で確認でき、また断続ナデ技法Bの有無で工人の系譜が異なる。断続ナデ技法B円筒埴輪は、全形は不明だが、底部から4段目まで残存するものがある。2段目に円形スカシ孔を、4段目に逆三角形のスカシ孔を穿孔しており、別の破片で逆三角形スカシ孔の一段上に円形スカシ孔を穿孔しているものがあることから、5条6段構成以上の大型品A類である。外面調整は左傾したタテハケで、一部に断続的なヨコハケ、底部に限ってナデ調整を施す。スカシ孔は先述したとおりである。底部調整は認められない。断続ナデ技法Bを用いない円筒埴輪は、4条5段構成の大型品III A類で、各段に円形を直交して二つ穿孔する。外面調整はタテ方向を指向したタテハケで、底部調整は認められない。突帯は扁平で突出度が低く、外面に板状工具の押圧の痕跡が残る。以上のように、権現塚古墳では明らかに断続ナデ技法Bの有無は系統の違いを示している。

〔小隈山古墳（佐賀県佐賀市・大和町教育委員会1998）〕 墳丘長66m、後円部三段、前方部二段の前方後円墳である。円筒埴輪の全形は不明だが、中型品、大型品A類である。断続ナデ技法Bは後者に認められる。外面調整タテハケ、底部はナデ調整を施すものがある。底部調整は認められない。円形スカシ孔を穿孔する。筑後・肥前では、断続ナデ技法B円筒埴輪は大型品に限って認められる点が特徴として挙げられ、権現塚古墳と小隈山古墳の円筒埴輪は法量や調整手法なども似通っており、関係性が窺える。

小 結

以上のように、地域ごとに古墳の埴輪を概観した。最後にそれをまとめてみたい。

まず、最もまとまった様相が読み取れるのは豊前地域である。各古墳から出土する埴輪の特徴で共通するものは、①細長いプロポーション、②外面調整にタテハケとナデ調整を用いる、③口縁部の形状、④スカシ孔の穿孔段がある。また、上ん山古墳と荒神森古墳では大型品が認められるが、両者とも調整手法や径、プロポーションが似通っている。これは、廣運寺山3号墳を除く古墳に認められるものであり、曽根平野と京都平野北部の埴輪は同一の集団、あるいは関係性の深い集団が製作したものと考えられる。古墳時代後期の埴輪生産体制は、拠点的生産地からの一元的供給が行われていたと想定されているが（高橋1994）、生産地自体はわからないものの豊前地域の状況はそれにあてはまるだろう。

そのなかで曽根古墳群は、古墳の立地や埴輪の特徴の差異から、茶毘志山古墳・上ん山古墳・畠山古墳のグループ（在地系）と荒神森古墳・丸山古墳・円光寺古墳のグループ（畿内系）というように、2つの首長系譜が想定されているが（宇野2003）、荒神森古墳と上ん山古墳の

埴輪は酷似しており、円光寺古墳の埴輪は上ん山古墳や茶毘志山古墳に近接する潤崎遺跡の埴輪窯で生産されている(井上2011)から、両グループの埴輪製作集団は同一である可能性が高く、それをふまえると首長系譜の違いと捉えられるかは疑問である^⑤。また、京都平野北部に関してみれば、4～5世紀と大型前方後円墳を築造していたが、6世紀初頭の番塚古墳を最後に前方後円墳の築造が停止する。逆に北接する曾根平野では4世紀前半に御座1号墳が築かれて以降、5世紀末頃の茶毘志山古墳まで前方後円墳が認められないが、茶毘志山古墳以降6世紀代に連続して前方後円墳が築かれる。したがって、5世紀末から6世紀初頭を境に豊前北部を治める勢力が変化した可能性が高い。南原古墳群や富久遺跡から出土した埴輪の製作技術やプロポーションが曾根古墳群とよく似ている一方、器高や底部径は一回り小型である点は、それによるものではないだろうか。京都平野の西部や南部の古墳では、異なる特徴の埴輪が樹立されており、曾根古墳群の被葬者はおよそ曾根平野から京都平野北部を統括していたと想定され、その傘下に所属した埴輪製作集団が支配領域内の埴輪を生産していたものと考えられる。

筑前や筑後、肥前地域では、豊前地域のようなまとまりや継続性は認められない。いずれも特徴が異なる埴輪を単発的に生産しており、それを担っていた埴輪製作集団は所属する地域で生産を中心に行っていたものではない。東光寺剣塚古墳は、大型品の存在や石屋形から筑後からの伝播を想定する研究もあるが(岸本1996)、東光寺剣塚古墳で主体をしめるのは中型品であり、またプロポーションも異なる。加えて、大型品は豊前地域でも認められるので、筑後からの伝播と考えるには材料が不足している。筑後のなかでも権現塚古墳と乗場古墳で、スカシ孔の配置や調整手法等が異なることから同一の集団が製作したとは考えにくく、やはり豊前地域のようなまとまりはない。

それでは、このような埴輪製作技術はどのようにして伝播してきたのだろうか。近畿地方の埴輪と北部九州の埴輪は、これまでみたとおり製作技術やプロポーション、規格が異なる。したがって、近畿地方の埴輪工人在九州に直接赴いて埴輪を生産したとは考えられない。先行研究では、大西氏・井上氏が畿内からの直接的伝播を想定しているが、特に井上氏は断続ナデ技法Bの伝播の背景に屯倉の存在を指摘している。非常に魅力的な指摘であるが、しかしながら井上氏が中心に取り扱った真覚寺古墳こそ畿内色の強い埴輪が用いられているものの、その他は前述のとおり近畿地方とは異なる点が多い。また、九州で断続ナデ技法B円筒埴輪が盛行するTK10型式期以降は、近畿地方での使用は下火になっており、その時期に何故断続ナデ技法Bを九州が受容したのか、その背景も考えていく必要があるだろう。くわえて、東光寺剣塚古墳は石屋形と断続ナデ技法Bが共伴するが、同様の状況は讃岐の王墓山古墳でも認められるし、豊前で用いられる外面のイタナデ調整も、伊予の三島神社古墳で使用されているから、四国との関係性も見落とせない^⑥。いずれにせよ、畿内と九州のダイレクトな関係だけで考えるのでは

なく、近畿・四国・九州と瀬戸内海航路を通じた交流関係のなかで検討を行っていく必要性がある。

断続ナデ技法B円筒埴輪を樹立する古墳の傾向としては、5世紀に首長墓が認められず、5世紀末から6世紀になって首長墓が再び築造されるようになる地域、あるいは突如として前方後円墳が現れる地域に認められる傾向が強い。曾根平野の事例はその代表的なものであろう。そして、断続ナデ技法B円筒埴輪を製作した埴輪製作集団は、新たに台頭した首長によって新たに組織された工人たちであった。単発的な生産か継続的な生産かの違いは、その勢力の消長に左右されるものと考えたい。

まとめ

断続ナデ技法B円筒埴輪について、分布や製作技術、規格等の分類、分析を行い、北部九州を対象に生産体制や製作集団とその背景を考察した。その結果、断続ナデ技法Bの分布は時期によって盛行する地域が異なること、製作技術や規格に関しても地域ごとに異なることを指摘した。そして、北部九州の中でも地域ごとに、継続的な生産を行っている地域と単発的な生産を行っている地域があることを指摘し、その背景と技法の伝播ルートに検討を加えた。上記の背景には、6世紀における首長墓の消長と瀬戸内海を媒介とする地域間交流といった2つの要素があり、それを複合的に考える必要がある。本論では、それを特定しうるのは筆者の力量不足により叶わなかったが、今後埴輪以外の要素も加えつつ、近畿・四国の様相もより深く検討をすることで、明らかになっていくものであろう。それは、今後の課題として研究を継続していきたい。

註

- ① 紀伊や播磨といった畿内周縁地域も含むため、便宜上近畿地方としている。
- ② 播磨においても、神戸市の高津橋大塚2号墳の1例が認められる。
- ③ 北花内大塚古墳やボケ山古墳といった大王墓級前方後円墳でも二次調整のヨコハケは散見されるが、これは断続ナデ技法B円筒埴輪に対応するものではなく、IV群系の工人とV群系の工人の両者が埴輪製作を行っていたものと考えられる。逆に権現塚古墳では、断続ナデ技法B円筒埴輪にヨコハケを施しており、断続ナデ技法Bを用いない円筒埴輪には認められない。
- ④ 井上義也氏は、円光寺古墳の断続ナデ技法B円筒埴輪について、資料数が少なく小片であることから、別古墳からの混入品と推定している（井上2011）。そして、埴輪の特徴から、北側に位置する荒神森古墳か丸山古墳の埴輪と推定している。しかしながら、南向きの前方後円墳である円光寺古墳の断続ナデ技法B埴輪は、両古墳から最も離れた前方部端やくびれ部などから出土しており、混入品とは考えにくい。したがって、本論では円光寺古墳に伴う埴輪として取り扱う。
- ⑤ 同様のことは上ん山古墳の報告書内でも指摘されている（関川2010）。
- ⑥ 他にも阿蘇溶結凝灰岩製の石棺など、九州と四国の交流を示すものがある。今回は筆者の力不

足から触れることはできなかったが、今後伝播ルートを考えていくうえで詳しく見ていきたいと考えている。

また、豊前地域は伊予との交流が盛んであったことを公益財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室の佐藤浩司氏に御教示いただいた。

参考文献

- 井上義也「『断続ナデ技法』円筒埴輪をもつ古墳の性格—福岡県粕屋町所在の真覚寺古墳と「糟屋屯倉」を中心に—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生—退職記念—』2004
- 井上義也「北部九州における畿内系埴輪」『古代文化』第59巻第4号 古代学協会 2008
- 井上義也「北部九州における埴輪工人の復原に関する諸例—ハケ目の観察を中心に—」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会 2011
- 宇野慎敏「丸山古墳」北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1984
- 宇野慎敏・関川妥「潤崎遺跡3（第3地点）」北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1994
- 宇野慎敏「九州古墳時代の研究」2003
- 宇野慎敏「円光寺古墳」北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2006
- 大西智和「地域性の発現からみた円筒埴輪の導入と展開の再解釈—九州の事例—」『九州考古学』第68号 九州考古学会 1993
- 小田富士雄他「岡為造氏収集 考古資料集成」『古文化談叢』第11集 1983
- 鐘方正樹・中島和彦「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』奈良市教育委員会 1992
- 鐘方正樹・中島和彦・根上直子「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究（下）」『古代文化』第47巻6号 古代学協会 1995
- 鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊 1997
- 鐘方正樹「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号 埴輪検討会 1999
- 鐘方正樹「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』2003
- 河内一浩「西日本における紀伊型埴輪の分布—埴輪からみた紀氏の航跡—「海」の古墳を考えるⅢ—紀伊の古代氏族と紀淡海峡周辺古墳—」『海』の古墳を考える会 2013
- 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978（川西宏幸「古墳時代政治史序説」塙書房 1988に再録）
- 川西宏幸「後期畿内政権論」『史林』第71巻第2号 1986
- 苅田町教育委員会「南原遺跡E地区」2007
- 岸本圭「北部九州における円筒埴輪の規格性」『九州考古学』第71号 九州考古学会 1996
- 岸本圭「九州における窯窯焼成導入以降の埴輪の展開」『九州の埴輪 その変遷と地域性—壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾』2000
- 岸本圭「九州の円筒埴輪にみられる各種技法」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』2003
- 北九州市教育委員会「高島遺跡第2次調査」2005
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「潤崎遺跡」1986
- 九州前方後円墳研究会編「九州の埴輪 その変遷と地域性—壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾」2000
- 久留米市教育委員会「史跡 御塚・権現塚古墳保存修理事業報告書」1995

- 小嶋篤「九州古墳時代後期の埴輪生産」『後期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会2008
- 関川妥「荒神森古墳2」北九州市教育委員会 2008
- 関川妥「上上山古墳」北九州市教育委員会 2010
- 十河良和「日置荘西町窯系埴輪と河内大塚山古墳」『埴輪論叢』第6号 2007
- 高橋克壽「山津照神社古墳の埴輪と6世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室 1995
- 千賀久「大和考古資料目録第15集 石見遺跡資料」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1988
- 中国四国前方後円墳研究会編『後期埴輪の特質とその地域的展開』2012
- 中村利至久「荒神森古墳表面採集埴輪にみる断続ナテ技法の一事例」『研究紀要』第17号 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2003
- 西本和哉「四国東部における古墳時代後期の埴輪」『後期埴輪の特質とその地域的展開』2012
- 野崎貴博「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究』第46巻第1号 1999
- 坂靖「埴輪編年と技法伝播の問題」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ2 1985
- 弘田弘司「埴輪」『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集 向日市教育委員会 1988
- 福岡市教育委員会「東光寺剣塚古墳」1991
- 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究—窖窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』2003
- 埋蔵文化財研究会編「埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—」2003
- 宮川泰男「第4節 南原古墳群と富久遺跡出土埴輪の歴史的意義」『南原遺跡E地区調査報告書』荊田町教育委員会 2007
- 森毅「今治西高校保管考古資料—埴輪—」『遺跡』第23号 遺跡刊行会 1983
- 森毅「愛媛県における埴輪研究の現状と課題」『遺跡』第26号 遺跡刊行会 1984
- 山内英樹「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）—特徴的な形態・技法を有する埴輪について—」『紀要愛媛』第2号 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2001
- 山内英樹「四国西部における古墳時代後期の埴輪」『後期埴輪の特質とその地域的展開』2012
- 八女古窯跡群調査団「立山山窯跡群」1972
- 大和町教育委員会「小隈山古墳」1998
- 和田一之輔「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集』2005

表1 断続ナテ技法B円筒埴輪出土古墳・遺跡一覧

番号	古墳・遺跡名	所在地	参考文献
1	物集女車塚古墳	京都府向日市	向日市教育委員会「物集女車塚」1988 向日市埋蔵文化財センター「長岡宮跡内裏「東宮」内郭後宮 野田遺跡・物集女車塚古墳」2011
2	昼神車塚古墳	大阪府高槻市	高槻市立今城塚古代歴史館「たかつきの発掘史をたどる 附編高槻市天神町所在昼神車塚古墳」2015
3	南塚古墳	大阪府茨木市	茨木市「新修茨木市史」第七巻資料編考古 2014

4	園田大塚山古墳	兵庫県 尼崎市	尼崎市教育委員会『尼崎市中ノ田遺跡Ⅱ (大塚山古墳を中心に)』1987
5	塚原 B41号墳	大阪府 高槻市	高槻市『高槻市史』第六巻 考古編 1973
6	猪名寺廃寺下層	兵庫県 尼崎市	和田一之輔「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集』2005
7	市尾墓山古墳	奈良県 高取町	高取町教育委員会『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 1984 高取町教育委員会『国指定史跡市尾墓山古墳 3・4・5 次発掘調査概報』『国指定史跡市尾墓山古墳整備報告書』2006
8	笹鉾山1号墳	奈良県 田原本町	藤田三郎他『笹鉾山古墳群一第一～五次発掘調査概報』田原本町教育委員会 2005
9	まるこ山古墳	奈良県 広陵町	広陵町教育委員会『まるこ山古墳一第2次発掘調査報告』2007
10	小墓古墳	奈良県 天理市	泉武『小墓古墳』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和61・62年度天理市教育委員会 1988 泉武『小墓古墳』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和63・平成元年度 天理市教育委員会 1992 石田大輔「6. 小墓古墳の検討」『柚之内古墳群の研究』柚之内古墳群研究会 2014
11	鳥屋ミサンザイ古墳	奈良県 橿原市	笠野毅「身狭桃花鳥坂上陵整備工事箇所の調査」『書陵部紀要』第41号 1989
12	毘沙門塚古墳	奈良県 桜井市	桜井市文化財協会『桜井市埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』1994
13	石見遺跡	奈良県 三宅町	千賀久『大和考古資料目録第15集 石見遺跡資料』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1988
14	北花内大塚古墳	奈良県 葛城市	加藤一郎・清喜裕二「飯豊天皇埴口丘陵墳塋護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第58号 2007 加藤一郎・清喜裕二「飯豊天皇埴口丘陵墳塋護岸工事その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第59号 2008
15	土師遺跡	大阪府 堺市	白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』2008
16	平井塚古墳	大阪府 堺市	堺市教育委員会『平井塚古墳(跡)発掘調査概報』1971 白石太一郎編『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』2008
17	小阪遺跡	大阪府 堺市	大阪府文化財センター『小阪遺跡2』2000

18	大園遺跡	大阪府 高石市	大園遺跡調査会1976『大園遺跡発掘調査概要』
19	南口古墳	大阪府 大阪市	大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』1995
20	東弓削遺跡	大阪府 八尾市	八尾市教育委員会『東弓削遺跡』1976
21	郡川西塚古墳	大阪府 八尾市	八尾市教育委員会『高安千塚古墳群基礎調査総括報告書』2012 中村浩「大阪府八尾市郡川西塚古墳出土須恵器について」『大谷女子大学紀要』第26号第1輯 1991
22	郡川東塚古墳	大阪府 八尾市	八尾市教育委員会『高安千塚古墳群基礎調査総括報告書』2012 八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ』 2002 (財) 八尾市文化財調査研究会『八尾市立埋蔵文化財センター報告7』2006
23	誉田白鳥遺跡	大阪府 羽曳野市	羽曳野市教育委員会『誉田白鳥遺跡発掘調査概要報告書』1992
24	ボケ山古墳	大阪府 藤井寺市	徳田誠志「仁賢天皇埴生坂本陵整備工事箇所の調査」『書陵部紀要』第44号 1993 徳田誠志「仁賢天皇埴生坂本陵整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第45号 1994 大阪府教育委員会「羽曳野市仁賢陵古墳外堤及び野々上遺跡試掘調査報告」『節・香・仙』第28号 1979
25	白髪山古墳	大阪府 羽曳野市	笠野毅「河内坂門原陵外堤護岸工事区域及陵前排水柵設置箇所の調査」『書陵部紀要』第32号 1981
26	八幡山古墳	大阪府 羽曳野市	羽曳野市『羽曳野市史』第3巻資料編1 1994
27	三日市3号墳	大阪府 河内長野市	三日市遺跡調査会『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1988 河内長野市遺跡調査会『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1994
28	宮谷1号墳	大阪府 大東市	河内一浩「埴輪をめぐる製作集団の動向―生駒西麓における試み」『考古学論集3』1990
29	井辺八幡山古墳	和歌山県 和歌山市	森浩一『井辺八幡山古墳』1972
30	井辺前山32号墳	和歌山県 和歌山市	和歌山県教育委員会『和歌山県文化財学術調査報告』第一冊 1966 河内一浩「埴輪にみる後期「岩橋千塚」古墳集団の階層性」『紀伊考古学研究』第6号 2003
31	大谷山22号墳	和歌山県 和歌山市	関西大学文学部考古学研究室『岩橋千塚』1967

32	船戸箱山古墳	和歌山県 岩出市	丹野拓・藤井保夫「4. 船戸箱山古墳」『緊急雇用対策特別基金事業に係る埋蔵文化財発掘資料整理概報』和歌山県文化財センター 2005
33	平池1号墳	和歌山県 紀の川市	三宅正浩・河内一浩「和歌山県貴志川町所在平池一号古墳とその円筒埴輪」『古代学研究』第115号古代学研究会 1987
34	前山A58号墳	和歌山県 和歌山市	萩野谷正宏「前山A58号墳の埴輪」『大王の埴輪 紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—特別展記念シンポジウム資料集』2011
35	香色山遺跡	香川県 善通寺市	中国四国前方後円墳研究会編「後期埴輪の特質とその地域的展開」2012
36	王墓山古墳	香川県 善通寺市	笹川龍一「史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書」善通寺市教育委員会 1992
37	雄山4号墳	香川県 坂出市	香川県教育委員会「雄山古墳群」2000
38	公文山古墳群	香川県 琴平町	中国四国前方後円墳研究会編「後期埴輪の特質とその地域的展開」2012
39	韓崇山古墳群	徳島県 板野町	藤川智之「『徳島県の埴輪に関する一、二の問題』」『徳島県埋蔵文化財センター年報』vol. 2 1991
40	前山遺跡	徳島県 小松島市	河内一浩「阿波における石見型埴輪の受容」『考古学と地域文化』2009
41	蓮華池遺跡	徳島県 板野町	徳島県教育委員会「四国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 蓮華谷古墳群（Ⅲ）蓮華池遺跡（Ⅰ）」1994
42	波賀部神社古墳	愛媛県 松山市	長井数秋・岡田俊彦「波賀部神社古墳」『前方後円墳集成 中国四国編』1991 富田尚夫「資料紹介 松山市波賀部神社古墳出土須恵器について」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第8号 2003
43	三島神社古墳	愛媛県 松山市	松山市教育委員会1972「三島神社古墳」
44	治平谷3号墳	愛媛県 今治市	今治市教育委員会「唐子台遺跡群」1974
45	鯨山古墳	愛媛県 今治市	森毅「今治西高校保管考古資料—埴輪—」『遺跡』第23号 遺跡刊行会 1983

46	二つ塚古墳	愛媛県 松山市	松山市教育委員会『松山市埋蔵文化財調査年報19』2007
47	真覚寺古墳	福岡県 粕屋町	井上義也「『断続ナデ技法』円筒埴輪をもつ古墳の性格—福岡県粕屋町所在の真覚寺古墳と「糟屋屯倉」を中心に—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生—退職記念—』2004
48	東光寺剣塚古墳	福岡県 福岡市	福岡市教育委員会『東光寺剣塚古墳』1991
49	権現塚古墳	福岡県 久留米市	久留米市教育委員会『史跡 御塚・権現塚古墳保存修理事業報告書』1995
50	乗場古墳	福岡県 八女市	八女古窯跡群調査団『立山山窯跡群』1972
51	荒神森古墳	福岡県 北九州市	関川妥『荒神森古墳2』2007
52	曾根丸山古墳	福岡県 北九州市	宇野慎敏『丸山古墳』1984
53	廣運寺山3号墳	福岡県 吉富町	井上義也「『断続ナデ技法』円筒埴輪をもつ古墳の性格—福岡県粕屋町所在の真覚寺古墳と「糟屋屯倉」を中心に—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生—退職記念—』2004
54	小隈山古墳	佐賀県 佐賀市	大和町教育委員会『小隈山古墳』1998
55	高島2号墳	福岡県 北九州市	北九州市教育委員会『高島遺跡—第2次調査—』2005
56	潤崎遺跡	福岡県 北九州市	宇野慎敏1986『潤崎遺跡』1986
57	南原1号墳	福岡県 荏田町	荏田町教育委員会『南原遺跡E地区』2007
58	南原5号墳	福岡県 荏田町	荏田町教育委員会『南原遺跡E地区』2007
59	富久遺跡	福岡県 荏田町	荏田町教育委員会『南原遺跡E地区』2007
60	機織塚古墳	宮崎県 新富町	九州前方後円墳研究会 『九州の埴輪 その変遷と地域性』2000

61	水神塚古墳	宮崎県 新富町	九州前方後円墳研究会 「九州の埴輪 その変遷と地域性」2000
62	高津橋大塚 2号墳	兵庫県 神戸市	神戸市教育委員会「白水遺跡第3・5・6次・高津橋大塚遺跡第 2次発掘調査報告書」2000
63	上ん山古墳	福岡県 北九州市	関川妥「上ん山古墳」2010
64	前の山古墳	大阪府 羽曳野市	有馬伸・清喜裕二・徳田誠志「白鳥陵噴莖裾護岸その他工事区域 の調査」「葦陵部紀要」第54号 2003
65	円光寺古墳	福岡県 北九州市	宇野慎敏「円光寺古墳」2006
66	野々上 埴輪窯	大阪府 羽曳野市	羽曳野市教育委員会「古市遺跡群Ⅲ」1981

図版出典

図1：弘田1988の図を再トレースし、改変

図2：鐘方・中島1992より引用

図3：八女古窯跡群調査団1972を再トレースして作成

図4：上ん山古墳…関川2010を再トレース 荒神森古墳…関川2007を再トレース
曾根丸山古墳…宇野1984を再トレース 円光寺古墳…宇野2006を再トレース
高島2号墳…北九州市教育委員会2005を再トレース

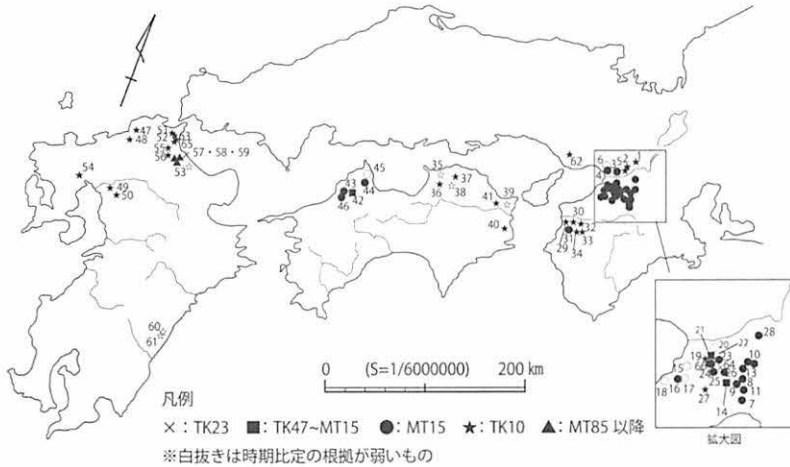
図5：荻田町教育委員会2007を再トレース

図6：東光寺剣塚古墳…福岡市教育委員会1991を再トレース
真覚寺古墳…井上2004を再トレース

図7：乗場古墳…八女古窯跡群調査団1972を再トレース
権現塚古墳…久留米市教育委員会1995を再トレース
小隈山古墳…大和町教育委員会1998を再トレース

図8：1・5・7…高島2号墳（北九州市教育委員会2005「高島遺跡 第2次調査」を再トレース）
2…荒神森古墳（北九州市教育委員会2007「荒神森古墳2」を再トレース）
3…富久遺跡（荻田町教育委員会2007「南原遺跡E地区」を再トレース）
4…南原1号墳（同上）
6…上ん山古墳（北九州市教育委員会2010「上ん山古墳」を再トレース）

表1：筆者作成



- 1: 物集女車塚古墳 2: 昼神車塚古墳 3: 南塚古墳 4: 園田大塚山古墳 5: 塚原B41号墳 6: 猪名寺廃寺下層 7: 市尾墓山古墳
8: 笹針山1号墳 9: まるこ山古墳 10: 小墓古墳 11: 鳥屋ミサンザイ古墳 12: 豊沙門塚古墳 13: 石見遺跡 14: 北花内大塚古墳
15: 土師遺跡 16: 平井塚古墳 17: 小阪遺跡 18: 大園遺跡 19: 南口古墳 20: 東弓削遺跡 21: 郡川西塚古墳 22: 郡川東塚古墳
23: 菅田白鳥遺跡 24: ボケ山古墳 25: 白髪山古墳 26: 八幡山古墳 27: 三日市3号墳 28: 宮谷1号墳 29: 井辺八幡山古墳
30: 井辺前山32号墳 31: 大谷山22号墳 32: 船戸箱山古墳 33: 平池1号墳 34: 前山A58号墳 35: 香色山遺跡 36: 王墓山古墳
37: 雄山4号墳 38: 公文山古墳群 39: 韓塚山古墳 40: 前山遺跡 41: 蓮華池遺跡 42: 波賀部神社古墳 43: 三島神社古墳
44: 治平古墳3号墳 45: 鮎山古墳 46: 二つ塚古墳 47: 真覚寺古墳 48: 東光寺剣塚古墳 49: 権現塚古墳 50: 乗場古墳 51: 荒神森古墳
52: 曾根丸山古墳 53: 廣運寺山3号墳 54: 小隈山古墳 55: 高島2号墳 56: 潤崎遺跡 57: 南原1号墳 58: 南原5号墳 59: 富久遺跡
60: 機織塚古墳 61: 水神塚古墳 62: 高津橋大塚2号墳 63: 上ん山古墳 64: 前の山古墳 65: 円光寺古墳 66: 野々上壇輪窯

図1 断続ナデ技法B円筒埴輪の分布図

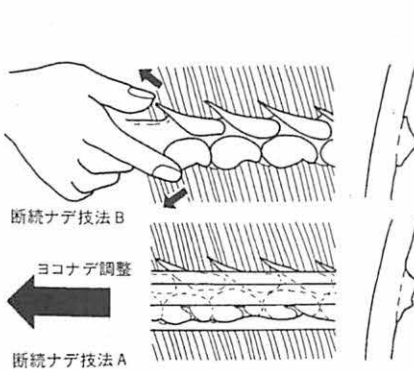


図2 断続ナデ技法模式図

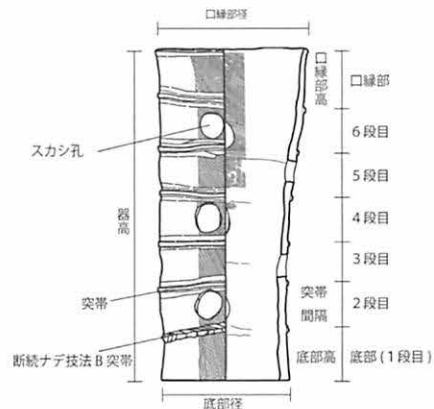


図3 円筒埴輪各部名称図

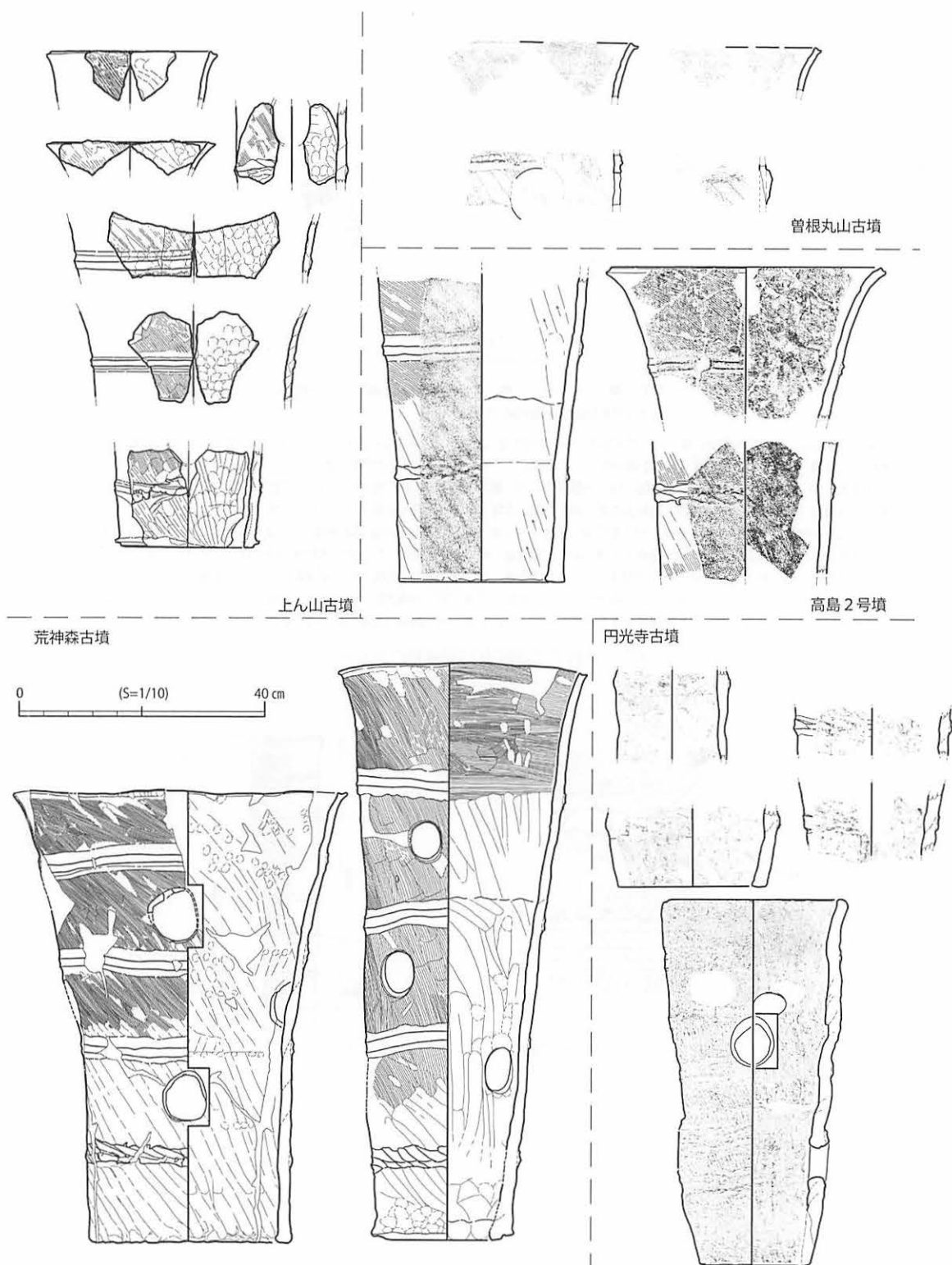


図4 曾根平野の円筒埴輪実測図

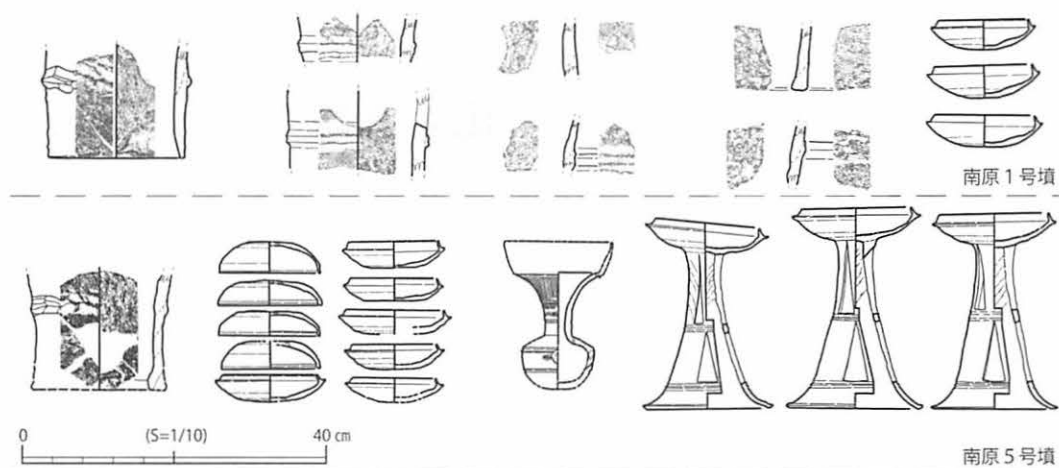


図 5 京都平野の円筒埴輪・土器実測図

富久遺跡

東光寺剣塚古墳

真覚寺古墳

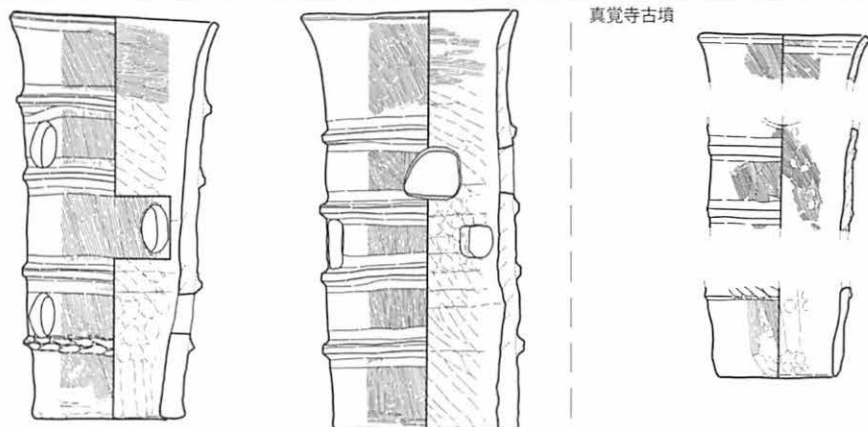


図 6 筑前の円筒埴輪実測図

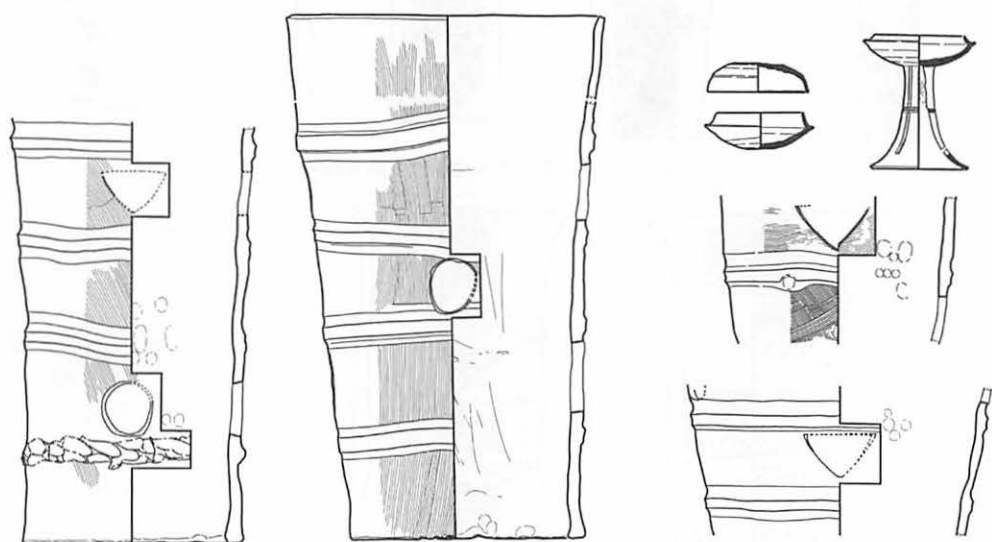
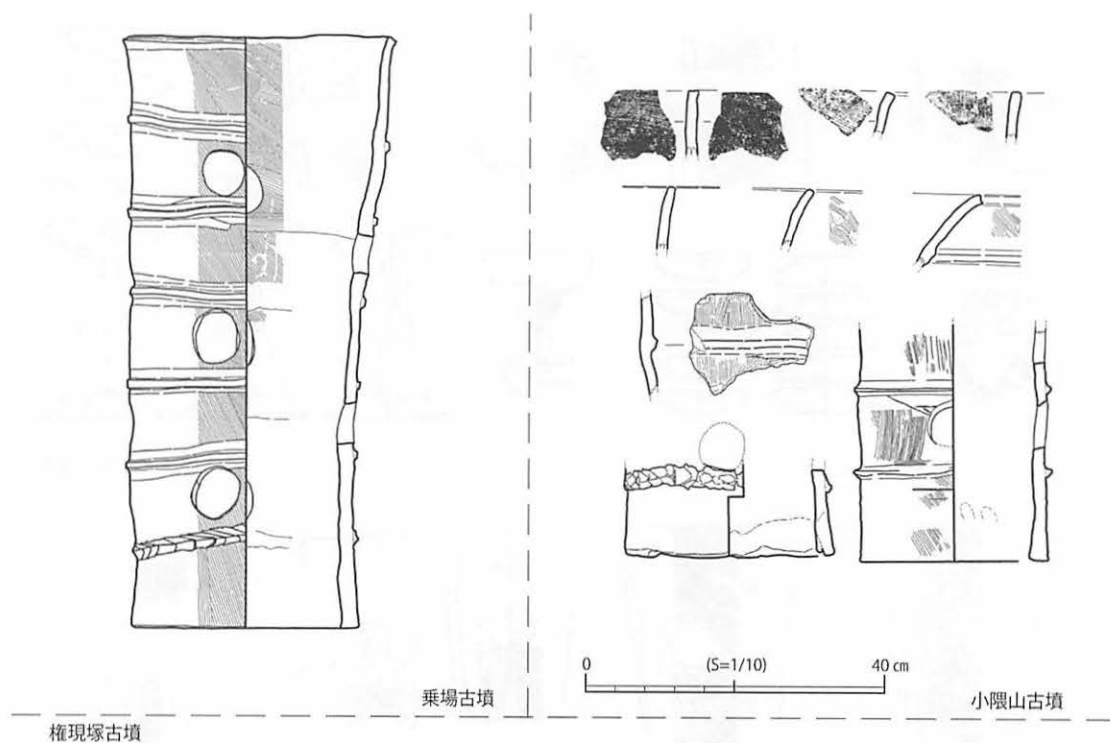


図7 筑後の円筒埴輪・土器実測図

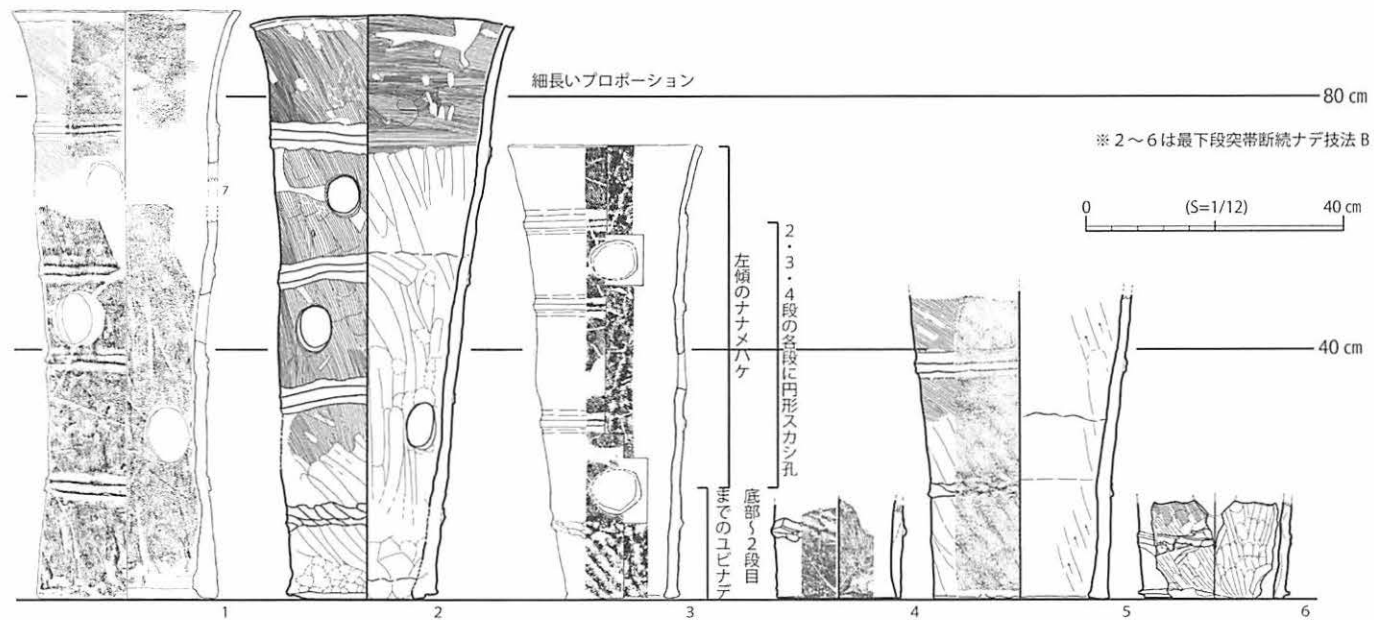


図8 北九州市域（曽根平野）出土埴輪と苅田町域（京都平野）出土埴輪の比較図